

1. イエスは弟子たちにこう言われた。「つまずきが起こるのは避けられない。だが、つまずきを起こさせる者は、忌まわしいものです。
2. この小さい者たちのひとりに、つまずきを与えるようであったら、そんな者は石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。
3. 気をつけていなさい。もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。
4. かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます。』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」
5. 使徒たちは主に言った。「私たちの信仰を増してください。」
6. しかし主は言われた。「もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があったなら、この桑の木に、『根こそぎ海の中に植われ。』と言えば、言いつけどおりになるのです。
7. ところで、あなたがたのだれかに、耕作か羊飼いをするしもべがいるとして、そのしもべが野らから帰って来たとき、『さあ、さあ、ここに来て、食事をしなさい。』としもべに言うでしょうか。
8. かえって、『私の食事の用意をし、帯を締めて私の食事が済むまで給仕しなさい。あとで、自分の食事をしなさい。』と言わないでしょうか。
9. しもべが言いつけられたことをしたからといって、そのしもべに感謝するでしょうか。
10. あなたがたもそのとおりです。自分に言いつけられたことをみな、してしまったら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです。』と言いなさい。」

説教

今日は新たに役員となる兄弟姉妹の任職式があります。それに、一年間の奉仕者を募っていますので、奉仕者の心構えについて、イエスさまの教えを共に学びましょう。

ここで、イエスさまは、一連の話の流れの中で、奉仕者の心構え、奉仕者の精神を話します。

イエスさまは1節で「つまずきが起こるのは避けられない。だが、つまずきを起こさせる者は、忌まわしいものです」と言われます。「つまずき」は「スキャンダル」の語源で、もともとは家畜を欺す「罾の餌（飴とか）をつけた棒」を意味します。人を神から遠ざける「甘い誘惑」「甘言」すなわちサタンの罾のことです。イエスさまは、人に神の栄光をあらわさず人を神から遠ざける「つまずき」をもたらす者は「忌まわしい」、「石臼を首にゆわえつけられ」底知れぬ海に永久に沈んでいろと呪いの言葉を浴びせます(2)。

そして、「もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒め」、「悔い改めれば、赦しなさい」と言われます(3)。たとえ一日に七度罪を犯しても、「悔い改めます」と言って七度来るなら、赦してやりなさいと言うのです(4)。こうして、罪を赦しながら教えます。一度のみならず、何度も何度も教えます。わかるまで教えます。ここにイエスさまの弟子の使命と責任があります。教会の使命は人をさばくことではありません。さばかず教えます。しかも徹底的に教えます。わかるまで教えます。わからなくても教えます。いのちある限り人には可能性があるのです。罪を悔い改めるよう、とにかくひたすら神のことばを教える、ここにキリストのからだなる教会の使命があります。

そんなことが果たして自分にできるのか？弟子たちは恐れます。それで、イエスさまにお願いします。「私たち

の信仰を増してください。」(5) 弟子たちは、自分たちの「信仰」が増大し、どんどん増し加わって、何か信仰の巨人のようになれば、それで自由自在に人を赦してみことばを教えることができるものだと思っていました。これにイエスさまは答えます。「もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があったなら、この桑の木に、『根こそぎ海の中に植われ。』と言え、言いつけどおりになるのです。」(6) 「信仰」は「からし種」ほどでいいのだとイエスさまは言われます。わかりにくい表現ですが、信仰などほとんど必要ないという意味ではありません。「からし種」はこの世で最も小さな種としてイエスさまご自身が説明していたものです。しかも、それが畑に蒔かれると、「どの野菜よりも大きくなる」のです(マタイ 13:31-32)。大きな信仰を目指す弟子たちに、イエスさまは、この世の最も小さな「からし種」を挙げて、小さくても生命力に満ちた「からし種ほどの信仰があったなら」と言われます。そうすれば、不可能も可能になり、できないこともできるようになると言います。イエスさまは弟子たちの信仰の中身、信仰の実質を問うたのです。

それでは、主の奉仕者が備えるべき、力ある生きた「からし種」ほどの本物の信仰とはどんなものなのでしょう。イエスさまは、これを主人としもべの関係に喩えます。「ところで、あなたがたのだれかに、耕作か羊飼いをするしもべがいるとして、そのしもべが野らから帰って来たとき、『さあ、さあ、ここに来て、食事をしなさい。』としもべに言うのでしょうか。かえって、『私の食事の用意をし、帯を締めて私の食事が済むまで給仕しなさい。あとで、自分の食事をしなさい。』と言わないのでしょうか。しもべが言いつけられたことをしたからといって、そのしもべに感謝するのでしょうか。」(ルカ 17:7-9) 確かにこの通りで、「耕作」にしても「羊飼い」にしても、外で汗まみれ、泥まみれになりながら働く重労働です。でも、そんなに大変な仕事から帰って来たからといって、主人がしもべの労をねぎらって、「いやあ大変だったね、さあ、さあ、ここに来て、食事をしなさい」と言うはずがありません。いちいち感謝するはずもありません。なぜなら、それが彼の仕事だからです。主人がしもべなのではなく、彼が主人のしもべです。いちいち主人に感謝されることを期待したり、あるいは、主人が自分に給仕してくれることを願っているとするならば、それはもはやしもべとは言えません。しもべでなく、主人です。主人は、しもべの労をねぎらうことなく、感謝もすることもせず、しもべに向かってこう言います。「私の食事の用意をし、帯を締めて私の食事が済むまで給仕しなさい。あとで、自分の食事をしなさい。」

結論としてイエスさまはこう言われます。「あなたがたもそのとおりです。自分に言いつけられたことをみな、してしまったら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです。』と言いなさい。」(10) 「役に立たない」という言葉には「役立たずの、価値のない、ふさわしくない、惨めな」という意味があります。どんなに重労働をして主人に貢献しても、「どうです、私はあなたのために役に立ったでしょ！すばらしく価値あるしもべでしょ！」と言ってはならない、むしろ「自分は役立たずの、価値なき、惨めなしもべです」と言え、とイエスさまは教えます。どんなに主人のために有益な貢献をしても、と言うより貢献をしたと自分で思っても、だからといって、それで主人に認めてもらおうとか、感謝してもらいたいとか、貢献に報いて報酬を期待するということがあってはならないと言うのです。「なすべきことをしただけです」の直訳は「なすべき義務(借金返済)を果たした」です。どんなに大変な重労働を主人のためになしたとしても、それは主人に対する、いわば借金返済に過ぎず、自分が主人に良くした以上に、既に主人は自分に良くしてくださっているというのです。主人が自分に良くしてくれた絶大な恩は、到底一度に返すことができません。それで、日々その恩に報いるかたちで、少しずつ少しずつ果てしない主人の恩に報いて主人にお礼奉公している、それが「なすべきことをしただけです」との告白です。これは真実な告白です。ここに主の働きをする奉仕者の心構えが教えられています。

奉仕は、私たちの主人である神の恵みに感謝し、恵みに応えてなすものです。みんながやるから自分もやらなきゃといった義務感や強迫観念にかられてするものではありません。神からの報いや御利益を求めてするものでもな

く、あるいは自分の自己満足や自己実現、見栄のためにするものでもありません。それはただ神の恵みに感謝してするものです。私をこの世に造り、我が身と魂を永遠の滅びから買い取って救い出してくださった神の恵みに感謝して、喜んで奉仕します。神があまりに多くの恵みをくださったのですから、報いても報いても、どんなに汗と泥にまみれて奉仕しても、犠牲を払っても、全く足りません。身を粉にして奉仕しても、「なすべきことをしただけです」。「私は役に立たないしもべ」なのです。

神の恵みを知らなければ、自己満足、自画自賛しかありません。あるいは、どんなに神から恵みを受けているのかわからないのですから、人からの報いを期待するしかありません。そして、それを得られなければ、落胆し、失望し、やる気をなくして、「自分はこんなによく頑張っているのに」と人を恨みます。神の恵みを知らなければ、人に失望するだけです。それは本当に疲れる奉仕です。自分も疲れるし、人も疲れさせます。自分を殺し、人をも殺します。それは主の奉仕になりません。

奉仕者に何より必要なことは、神の恵みを知ることです。思い出すことです。何度も何度も、毎週毎週、そして毎日毎日、神がどんなにこの罪深い自分を愛して、自分に良くしてくださったのかを思い出さなければなりません。神はこの私をこの世に造り、キリストの血の価をもって私を罪と滅びから永遠に救い出してくださいました。そして、今日もとこしえの希望のうちに生かしてくださっています。私のもので神からもらわなかったものは一つもありません。世界は神の恵みに満ちています。この神の恵みを思い出す時、神は真に価値ある最も素晴らしい方であることがわかります。と言うより、神だけが、この天地宇宙、世界の歴史、私の人生のただ中で、最高に素晴らしい良い働きをなさる方です。今も生きて働いて、最高に良い働きを永遠になし続けるのです。この神を知る時、私の良いと思っていた働きなどは、あまりに無益であると悟ります。自分はあまりに役立たずで、価値なく惨めな者である事実を思い知ります。神の偉大さを知ると同時に、自分自身のあまりの情けなさを痛感するのです。それでこう告白します。「私は役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです。」

そもそも、どんなに良い働きをしたとしても、それができるのは神の恵みです。神から体力と気力と財力と知恵と日毎の糧と生きる命、さらには神を信じる信仰と永遠のいのちまで、とにかく何もかもいただいているからです。良き働きも神の恵みなのです。これが生きた信仰です。神のいのちに満ちた生きた信仰です。自分も生き、人も生かす、「からし種」の信仰です。

教会奉仕は主の奉仕です。主イエスさまのお働きです。そこには決して奢りや自惚れがあってはなりません。どんなにそれまで良い働きをなしてきたとしても、それでいいとか充分とか自己満足していたらそれで終わりです。信仰も奉仕も、いのちを失います。それで終わっていいならそれでもいいのですが、そこには主のいのちはありません。神の栄光は見えません。その人しか見えません。罪深く、疲れて、生気ない、その人しか。自分の功績を数え上げたり、自分は神と人のために役に立っていると自己讃美している場合ではありません。自分じゃなく神を讃美しなければなりません。自分の偉大さではなく神の偉大さをほめたたえなければなりません。自分が神に「認めてよ」と願う前に、あなたが神を認めなければなりません。神の偉大さ、すばらしさ、聖さ、恵み、神がどんなにあなたを愛しておられるか、恵んでくださっているのかを、あなたが認めなければなりません。その偉大で恵み深い神の恵みに応え、その偉大な神の働きをなすべく召されて用いられていることに、心から満足し、感謝し、誇りとし、喜んで主に仕える、ここに本物の信仰があり主の奉仕があるのです。「あなたがたもそのとおりです。自分に言いつけられたことをみな、してしまったら『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです。』と言いなさい。」(10)

毎日、聖書を読み、祈りながら、神に召される時まで、喜んでひたすら神と人に仕える主のしもべとなられるよう祈ります。